

## 24

## 明治10年前後の東京府の医療・福祉状況

—東京府統計表に見る養育院と東京府病院—

稲松 孝思

東京都健康長寿医療センター

明治早期の東京の医療状況については、従来東大医学部、順天堂大学の歴史について語られることが多く、東京府のことについてはあまり語られてこなかった。今回、東京府統計表明治9-13年版を根拠に、当時の状況につき述べてみたい。

「養育院」は、大久保一翁府知事の、営繕会議所（町会所改め）に対する救貧対策の諮問に対する答申、「救貧三策」を実現するものであった。明治5年10月、本郷の加賀藩上邸空長屋跡を仮施設で業務をはじめ、明治6年2月に上野（現東京芸大美術学部）で恒久施設を出発させた。当初、幕府時代から引き継がれた共有金（七分積金）を財源とする設立運営であったが、明治9年5月、東京府の経営となっている。明治10年の統計表によれば「養育院」は、敷地5493坪、建物832.5坪、医師5名、吏員12名、年間延べ在籍者、男444名、女231名。同年末在籍者は男213名、女122名、年齢（男-女）。~7歳未満36-20名、7~15歳未満14-339名、15~69歳144-67名、70歳以上12-14名。退院（自活、男71名、女45名。他施設、男18名、女6名。死亡、男140名、女58名。逃亡、男2名、女0名）。健康な収容者に以下の作業をさせ、小遣い金を支給している。作業内容は漉き紙、草取り、洗濯、マッチ箱、按摩、草履、髪結い、団扇骨、筆再生、封筒、炭団などである。

「東京府病院」の設立は、養育院と平行して、明治6年1月に公布され、明治7年2月に皇室下賜金1万円を原資に東京府営で、芝愛宕下（現慈恵医大）に開設された。その後、第一分局、第二分局、出張所（北品川、千住宿など）を開いている。本院の施設規模は敷地4809坪、建物960坪、医師31名（英外科医、米蘭内科医）、吏員17名。年間入院患者数 男9042名、女4378名。疾病は：鼻咽喉病506、頸部病75、背腰痛71、胸腹部病85、泌尿器病208、生殖器病182、直腸肛門病202、上肢病384、下肢病440、皮膚病470、梅毒755などであった。入院は4段階に利用料が定められる一方、無料の施療患者も引き受けている。医師に高給の御雇外国人2-3名を抱え、薬局方の発行、医術開業試験の実務（明治11-16年、合格/受験、404/1715名）、産婆教習所、種痘外来なども行い、幅広く教育病院的角色を果たしている。なお、養育院医長に栗田胤頭が派遣され、医師も東京府病院からの派遣となっている。また、養育院収容者で元気なものは病院の介護人として働くなどの連携体制がとられた。安政4年に大久保忠寛（一翁）が蕃書調所総裁のときに提出した西洋式小石川養生所創設意見を、明治に実現したものともしえる。東京府病院のスタッフには、旧幕府関係者が多い。

なお、明治11-13年の統計表では、東京府内で以下の病院の活動（開設年、院長名、医師数）が記載されている。東京府病院（明6、岩佐純・坪井信良・長谷川泰、24名）、同第一分局（明9、牧山脩卿、11）、同第二分局（明9、小林亘、5）、脚気病院（明11、長谷川泰、22）、癲狂院（明6、長谷川泰、3）、以下民営：順天堂病院（明6、佐藤尚中、8）起癆病院（明8、後藤昌文、7）、桐原病院（明9、桐原真師、3）、以下明治11年度には、竹樹堂病院（青木弼、X）浅草病院（大森良平、5）、告成堂病院（岩佐純、5）癲狂病院（林元春、1）博濟堂病院（浅田宗伯、6）、本所病院（坪井信良、10）、如春病院（浅田宗伯、14）、清須病院（山田業廣、8）、共立病院（杉田玄端、4）、協恤病院（山本泰、1）遠田脚気病院（遠田澄、1）、鶯溪医院（高松凌雲、2）このほかに、東京医学校-東大、軍関係の衛戍病院、一般開業医、福田院などの民間施設が当時の医療福祉を支えているが、この統計書には記載がない。